

内 容

* ヴィレッジセミナー2013年 研修報告(4)

4. メンバーの話

* 愛南町で研修会を開催しました！

長野敏宏

* ヴィレッジセミナー2013年 研修報告(4)

4. メンバーの話

(Joe) 今日では3名の方に来ていただいて、夫々のリカバリーについての話をさせていただきたいと思います。Tさん(女性)とMさん(女性)とZさん(男性)です。宜しくお願いします。

司会のクリスティーナさん宜しくお願いします。

(クリスティーナ) 先ほど Joeさんがヴィレッジの歴史についてお話をされ、後で館内見学をしていただくとおもいますが、これからは3名の方にお話をさせていただこうと思います。

先ず Zさんですが、過渡期にある青少年プログラムにいます。このプログラムは16歳から26歳までの方にサービスを提供しています。TさんとMさんはヴィレッジのメンバーの方です。この3名はサービスをとても良い状況で受けられている方々です。

最初はTさんですが、彼女は3週間位前から皆さんが日本から来るということで、不安感と共に心待ちにしていました。それでは彼女たちの「ヴィレッジでの旅」がどの様にして始まったかを話させていただきます。

(Tさん) 私がヴィレッジに来た理由は、事故に遭ったからです。当時私は他の人とコミュニケーションを取ることに恐怖感を持っていました。そして慢性のホームレスでした。最初は私の友達がヴィレッジにお世話になっていて、その友達が貴方も行った方が良いと言われてきました。その結果、私はコミュニティ・カレッジで学ぶことも出来ましたし、2ベッドルームのアパートに住んでいます。

私はヴィレッジに来てPSCにお世話になった訳ですが、今までお世話になっていたカウンセラーのひととPSCの人は全く違いました。カウンセラーは本を開けて「貴方の名前は何ですか？」と聞きますが、PSCの人は私の事をよく知っています。私は統合失調症が有りますが、ドクターによると統合失調症が有ってもその人の人格はその人の物で統合失調症は関係無いということを知られました。そしてPSCの人は私を1人の人間として、1対1で取り組んでくれました。私自身も1人の人間として受け入れてもらえたことは、リカバリーに繋がっています。

リカバリーというのは、本を開いたり比べたりして起きる事ではなく、実際その人と関与しながら起こるものだという事が分かりました。



この様にヴィレッジは色々な面で私を助けてくれています。私が外の人と繋がりを持つときも手伝ってくれましたし、飼っていた白い犬を旅行先で見失ってしまった時も、ヴィレッジの人は私の大事な犬という事が分かっていますので6か月間かかりましたが私のところに戻してくれました。ヴィレッジの人は私の生活の中で沢山助けてくれていることが良く解ります。そして自分の生活について色々教えてくれました。

ヴィレッジが私と1対1の取り組みをしてくれたおかげで、他の人とコミュニケーションを取る事が出来るようになりましたし、統合失調症という診断名ではありますがその診断名も変わっていくのかもしれないと思いまがら私自身の生活を送っています。そして私は中学2年迄しか学校に行かなかったのですが、今はコミュニティ・カレッジに最後まで通って勉強したいと思っています。

有り難うございました。

(クリスティーナ) それではMさん、貴方がヴィレッジに来た理由や、その時の様子を話していただけますか？

(Mさん) 私は凄く貧困な家庭で、家の中はゴチャゴチャでドラッグをやっているような家庭に育ちました。私の周りは何時も良くない環境でした。

私は今32歳ですが、20歳を過ぎたあたりから精神病院を出たり入ったりして、自傷行為も何回もしました。その頃ヴィレッジの人が声をかけてくれて、私を1人の人間として対応してくれました。10年前から3年間ほど私の薬やドクターの事など面倒を見てくれ生活のサポートをしていてくれました。

私の出身はルイジアナなのですが、そこにはヴィレッジのようなプログラムは有りません。それで色々知ら出たところ、私の友人がヴィレッジから2ブロックのところに住んでいました。それで私はその友達を訪ねました。以前から私も色々調べてメンタルヘルスのサポートを求めましたが、その職員は既にオーバーワークで誠意を込めた対応をしていただくことは出来ませんでした。

私は友達のアパートに寝泊まりをしていましたので、ヴィレッジ地下のホームレスアシスタントプログラムに参加してみることにしました。そしてそこで色々手伝っていただきました。このプログラムはとても素晴らしいです。私に独立を進めてくれて、将来どの様な目標で生きていけば良いかということも考えさせてくれました。そして1月からは大学に行くことになりました。ゆくゆくは4年制の大学に行って心理学を学びたいと考えています。

ヴィレッジのリソースとして色々なセラピーが有り、私も色々チャレンジし、ヴィレッジの人もサポートしてくれましたが、ヴィレッジを卒業できる様な準備は出来上がっていません。私のこれ迄の人生は大変困難でした。人生のトラウマから未だ抜け出せていませんが、一番難しいのは自分に立ち向かう、自分を真正面から見てそれを認め、それに対してどの様にしたら良いかを自分で考え、突き進んでいくことですが、それはとても困難なことです。将来自分の前に立ちだかるのは自分自身なのです。今までずっとそうでしたが、ヴィレッジに来てから私は自分が願う以上の支援を頂いています。

私は10歳の頃から家の中がドラッガーばかりで狂っていたのでとても大変でした。しかしヴィレッジに来てからプログラムによって這い上がる事が出来ました。それで今は自分の経験を活かしながら同じような環境にいる人を助けるため色々なボランティアをしています。私はやっと思殻を破る事ができ前進していますが、それは一重にヴィレッジのおかげであると感謝しています。これからは私にインスピレーションを与えてくれて前に進めさせてくれたように、他の人に同じ様なことをしてあげたいと思っています。

有り難うございました。

(Zさん) 私はZです。私のメンタルヘルスの旅は病院から始まりました。17歳の時にトラウマが有り、その時、障害5のストレス症候群と言われたのですが、その時貰っていた薬は全く効果が有りませんでした。その後ロングビーチの聖アカデミーというところで新しい薬が処方されて、凄く効果が出ました。

聖アカデミーは青少年向けのヴィレッジとさせていただいて良いです。ヴィレッジと同じようなところで、そ

れが青少年向けに有るというところで、構造も大体ヴィレッジと同じです。そこの職員の方が本当に自分の事をよく知ってくれ理解してくれています。そこでは心理的なことや他の人との関わり合い、人前で喋ることなどを教えてくれました。それで私は自分の殻から抜け出せたような気がしています。

そこでは同じ問題を抱えている人や、違う問題でも問題を抱えている人がいますので、それらの人と話し合うことで私自身を更新することや技能を発展させる事ができましたし、うつ状態と戦うことも出来ました。そこではグループ活動もあり、公共の場に出ることもありますので、この様な事をやりながら自分を段々社会の中に露出していくことによって、引きこもりが段々薄れていっています。

私は病院から紹介されて聖アカデミーに行きました。私がそこに入った時から私の生活はより良い方向に向かっていきました。そこの精神科ドクターは診療してくれますが、オーバーな診察をするのではなく症状を良く聞いてくれ、態度もとてもフレンドリーで今までのメンタルヘルスの病院とは全く違っていました。

有り難うございました。

(クリスティーナ) 皆さん、彼女たちに聴きたい質問はありますか？

それでは質問が無いようですので私の方から質問したいと思います。「皆さんリカバリーでの今のゴールは何ですか？それから PSC が行ったことで皆さんのリカバリーに役立ったことは何でしたか？」

(Z さん) 私は今ソーシャルセキュリティ(生活保護)でお金が貰える様に手続きをしています。その収入が有ると自分で住まいを見つけ食料も買う事ができます。そして PSC の人は申請の手伝いをしてくれました。今はゼネラルビーツという一時的な支援金で 1 か月 200 ドル貰うことが出来ています。ですが今後ソーシャルセキュリティのお金が入るようになれば、自分で生活できるようになると思います。PSC の人は、こういうことが出来る、ああいうことも出来ると色々なことを教えてくれます。そして申請することは自分の責任ですが PSC の人は実現するようにサポートをしてくれました。

(M さん) 私にとって PSC が一番重要だったのは、私の話をいつも良く聞いてくれることです。時々彼女は私がどの様な背景からその様な話をするのか解らなかつたこともあると思うのですが、とにかく良く聞いてくれました。そして私がどん底になって、失敗した失敗したと言っているような時でも、彼女は私が今迄達成してきたことを 1 つ 1 つ言ってくれましたので、私はどん底から抜け出す事ができました。

(T さん) 私が経験して一番良かったと思うことは、この様な精神保健の面では 1 対 1 で対応してくれる人が最も重要だと思います。「私は仕事でこの職業をしているので」と言って 5 時で帰る人などは、私たちにとって全く役に立ちません。ヴィレッジスタッフの人たちは心からサポートしてくれていることが、良く解ります。そして自分の行っていることに喜びを感じているということも分かります。ですから職業としてお給料をもらうためだけに働いているのであれば、私たちのリカバリーは出来ないということだと思います。私たちに対して全てを受け入れてくれ、1 対 1 で対応してくれていることが、私の一番の助けになりました。

(クリスティーナ) M さんと Z さんは、明日朝 7 時から仕事です。皆さんがこちらで学んだことを共有して、そして私たちはどの様な事をしたら当事者の人たちの助けになるのかなど、ヒントになるようなことが有れば教えていただきたいと思います。PSC がどの様に係わったら良いのかなどもヒントが有れば教えてください。

(M さん) 私の場合は何らかの繋がりを作ることです。即ちお互いに協力する気持ちが無くてはいけません。相手が情熱を感じる様な物を見つけ出し、友達として繋がっていくことがとても大切だと思います。私の PSC は金曜日に卒業式に私を連れていきたいと言ったので私は行きました。そしてそこで卒業する人の話を聞きました。その時私は、私も何時かは卒業できる日が来るのだと確信を持ちました。連れて行ってくれた PSC に対して私は凄く感謝しています。先ず大切なことは私と PSC の間に信頼関係が生まれたことです。その信頼関係が有るからこそ私が今この状態でいられることだと思います。

(Z さん) 私の場合は相手の人を知れば知るほど良くなったということです。私の場合は野外のアクティビティによって自分の殻から出られたと思います。どの様な事かという、キックボードのトーナメントやピアと

ピアの関係で係わることによって自分が自分になって自分の殻から出られたということです。私もピアの方と関わることによって、自分をどの様に表現したら良いのかという事が分かりました。例えば病院であれば、相手と関わる時「はいこれがお薬ですから、飲んでください」という関係で、表面的な物だけで本当の自分を表す事ができません。野外のアクティビティにおいてはスタッフの方とも良い関係になれたし、自分自身も次はどのアクティビティなのかと深く関与していくような気分にもなれました。

(Tさん) 私の担当 PSC は 1 人ですがその PSC のために話すのではなく、全ての PSC に対しての話をしたいと思います。ヴィレッジの強みなのですが、PSC は 1 人ひとり考え方が違いますしやり方が違う場合もあります。1 人の PSC に話をし、また違う PSC に話をすると、違うやり方が返ってくることもあります。この様に違う PSC に話しかけることがヴィレッジでは自由に出来ます。色々な考え方を聞く事ができてとても良いところが、ヴィレッジの強みです。

(クリスティーナ) それでは最後になりますが 3 人の方に聴きたいことはありますか？

(参加者) 感覚的な質問になるかもしれませんが、「ヴィレッジに係わって初めて一人の人間として扱ってもらえた」と仰っていましたが、他のところと違うということはどの様なところで感じたのでしょうか？

(Zさん) 私は凄く嫌な経験もしました。前のところで「これをやりなさい」と言われ、やらないと薬を飲まされ意識がもうろうとすることが有り凄く嫌でした。その様な経験は自分の人生に凄くネガティブな影響を与えました。しかしヴィレッジでは PSC の人と色々話も出来ますし、自分のやりたいことも出来ます。そして他の人たちと自由な時間も過ごせて、自分が閉じ込められているという感覚は全く無くなりました。前のところで私は施設の中の一つの番号でしかないという気持ちが有りました。そしてちゃんとやらなければ罰を受けることが有りましたが、ここでは全くその様なことは有りませんでした。

(Tさん) 私は精神障がいがあるという重荷を背負っており、他人が私をその様にみているし自分のその様に思っているというスティグマが有りました。それによって自分が村八分にされているような気持ちでずっといましたが、ヴィレッジでは「それはそんなに悪いものではない」として「その様なことが有っても貴方は生活できる能力がある」という様なことを私に伝えてくれました。そしてそのコミュニケーションによって「自分をどの様に受け入れていくか」ということを教えてくれました。ここが違うと思います。

(クリスティーナ) 他に質問はありますか？ それではここで終わりにしたいと思います。

有り難うございました。

————— ☆ ————— ☆ —————

* 愛南町で研修会を開催しました！

長野敏宏

新型コロナウイルス感染症の影響によりこの3年、これまで積み重ねてきた研修・交流活動のあり方の大幅な変革を余儀なくされてきました。オンライン活用の飛躍的な一般化など得たものも多くあった反面、「人と人が会ってつながる」という大事な大事な機会を失ってきました。地域でもより繋がりが進化・深化したと思われることもありますが、分断が目立ってきたことがあるのも否定できない状況になってきていました。

そのような中で、コロナ禍と同様の活動でもいけないし、以前と同様の活動に戻すのももったいないし、次の時代への模索をはじめてみようと考えました。開催した研修会は以下のものです(申し訳ありませんが終了しました)。とても充実した研修になったことは言うまでもありませんが、今回は、この研修をどのような狙いで行ったかを書かせていただきます。

研修会のご案内

南宇和障害者の社会参加を進める会
南宇和心の健康を考える会
なんぐん地域ケア研究会

研修目的

「地域に住み、一生を生きる人の視点から、ライフステージに沿って必要な医療保健福祉・地域住民支援を学ぶ。またその連携について考える」

日時：令和5年5月27日（土） 9時30分～12時30分

場所：御荘文化センター

内容

○主催会の概略説明

「南宇和障害者の社会参加を進める会」、「南宇和心の健康を考える会」
「なんぐん地域ケア研究会」

○活動報告（調査途中経過報告）

愛南町における、ライフステージに沿って利用できる社会資源と連携

○制度政策と今後の方向性を学ぶ

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課長

林 修一郎 氏

子ども家庭庁 支援局 障害児支援課長（元老健局企画官）

栗原 正明 氏

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課

地域生活・発達障害者支援室 室長補佐 今井 貴士 氏

○鼎談

今後の地域医療保健福祉を考える

～ライフステージに沿った支援・連携の在り方～

指定発言：大坂 純 氏（東北子ども福祉専門学院副院長、厚生労働省「地域づくり加速化事業」運営委員会副委員長、伴走型支援実行委員会伴走型支援アドバイザー、復興庁心の復興事業選定委員会委員長）

○未来志向のテーマの設定

地域の取り組みから、高齢者福祉や障害者福祉の天井が（うっすらですが）見えてきたと個人的には感じていて、今後、それらの関係者、また地域住民が、より子どもたちへ関心や取り組みをシフトしていく必要があると、この数年考えてきました。メンタルヘルスの観点からも予防への重点シフトが絶対に不可欠です。

認知症ケアや障害者福祉において、愛南町では当初から「住民」を基盤に取り組みをすすめてきましたが、ふと子どものことを考えると、専門職や学校、家庭に任せきりの傾向が強いことにはいまさらながらに気付かされています（あくまで私見です）。今一度、ひとが生きる原点とも言える子ども時代の大切さに様々な立場の人が気づき、行動し、また、大人になってからやがて年若い人生を閉じていく、そのライフステージの連続性の中で必要な支援を行えるようになるきっかけになればと考えました。

また、この20年、厚労省はじめ様々な福祉制度政策等が急速に、大幅に、拡充されてきました。しかし、地域に住む人の視点からみると、それはあまりに膨大で見えにくい、とうてい自分で吟味して選択するところまで到達できない状況になっているように感じています。あくまで主体は地域に暮らす人、制度政策をより広く、より深く知り、主体的に選択していくためには地域全体で、（受援力も含め）力をつけていくしかない。また、それらの制度政策を地域で具現化する人もこれまでの一部の行政、事業者、実践家では到底間に合わない。新たな担い手が生まれてくるのがとても重要だと考えています。そのヒントを得られる、行動のきっかけになるようなテーマ、講師にお願いしました。（ちょっと贅沢すぎましたが）

○つながりづくり

この3年間、愛南町で、沢山のとても素敵な新しい仲間を迎えています。しかし、以前だと、数ヶ月で顔が見える関係をつくれるだけの多様多彩な機会があったのですが、それが失われていて、おどろくほど皆が繋がっていない状況で、それを打破したいと考えました。研修会当日だけでは勿体ないので、事前に若手とそれを支える中堅、ベテランが混じりプロジェクトを組みました。分断しかけていた関係性の修復にも注意を払いました(力不足でかなりご迷惑をおかけしましたが、)

あと、とてもとても大切と思っていたのは、他地域のみなさんとのつながりづくりでした。今回、交流促進協会からも仁木さんはじめ仲間たちが駆けつけ、子供関係(保健福祉教育)障害者福祉、保健、医療、高齢者福祉など多彩な参加者と、交流してくださいました。また、厚労省からも講師のみならず総勢で8名の方が2泊3日の長きにわたり、愛南町を訪れてください、夜遅くまで、活発な交流、まっすぐな意見交換をしてくださいました。やや閉塞感を感じていた地域の状況において、未来への希望につながったことは言うまでもありません。本当にありがとうございました。

○新型コロナウイルス感染症にどう向き合ったか

まず、研修のタイミングを図りました。5類移行により社会的責任がやや緩和され、また、地域の感染レベルが下がるだろう日程に設定しました。たまたまですが、絶妙、ドンピシャではなかったかと思えます。

会場設定にはかなり工夫をこらしました。新型コロナ感染症への考え方はおかれている立場やひとりひとりの捉え方で大きく異なります。そのどれもが間違いではないので、いろいろな選択をできるようにしました。次のように3つの会場設定を行いました。

- ① リアル会場、配信基地も兼ね備えたもの。生の熱量や細かなニュアンスが圧倒的に感じられます。
- ② 同建物内のオンライン会場。550人定員の大ホールに150名ほど入場。コロナ感染のリスクを大幅に避けながらも、参加者どうし顔をあわせることができ、また、講師などとの名刺交換にも足を伸ばすことができます。
- ③ オンライン参加。やはり、感染リスクを少しでも下げたい方、遠方の方、またオンラインの方が都合がいい方などにご利用いただきました。

トリプルハイブリッドといった感じでしょうか。とてもよかったですと感じました。

但し、音響・配信などの環境づくりにはひと工夫必要です。善家くんが大奮闘してくれ、完璧、でした！！ いつでも伝授、もしくは出張します(笑)

懇親会も行いました！ マスクに関してはそれぞれの判断でした。私自身は、、はずせず、、でしたが。70名を超える参加者が4時間近く、山出憩いの里温泉の屋外 BBQ で、活発な議論、交流が行われました。かけがえのない時間をそれぞれ過ごせたのではないかと思います。



—編集後記—

交流促進協会の活動も徐々にペースアップしていく目処がたちつつあると実感しました。現在、感染がじわじわ広がっていますので、その動向もみつつ、決してイケイケドンドンではない判断をしながら、着実に前に進みたいと思います。今後ともよろしく願いいたします！

今回、プロジェクトや研修の内容にはほぼ触れていません。また、なにかの機会に、と考えています。(長野)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会